

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究 B

研究期間：2009 ～ 2012

課題番号：21710251

研究課題名（和文）

二十世紀初めアメリカ合衆国の「家庭論」と移民女性—民族・人種関係を中心に

研究課題名（英文）

Immigrant women and the idea of “Home” in the early 20th century U.S.A.

研究代表者

一政（野村） 史織（ICHIMASA (NOMURA) SHIORI）

中央大学・法学部・准教授

研究者番号：20512320

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、20 世紀初めのアメリカ合衆国において、人種や民族、国家や「家庭」をめぐる言説形成に、移民女性たちがどう関わったのか分析することである。特に、「他者化」されていくアジア系移民と、白人アメリカ市民としての同化を目指した東欧系移民の経済・政治・文化・社会的背景を比較した。移民新聞など様々な資料の収集と量的、質的内容分析を通じ、移民女性たちが生み出す言説や言説形成の過程が、故郷やアメリカ合衆国の人種、民族、国家像の形成と深く関連していることが明らかになった。研究を通じ、近代の越境的なメディア活動に関する理論への理解を深め、越境という概念を検証することができた。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to examine how immigrant women engaged in transnational media activities and what kinds of discourses of nation, race and ‘home’ they consumed and produced in the early 20th century in the U.S.A. In this research, I compared the socio-political, economic and cultural contexts of East European and Asian immigrants, those who had become ‘white Americans’ and those who had become ‘The Other’. Various published and unpublished materials were collected, and quantitative and qualitative content analyses were deployed to examine these sources. The research revealed how discourses of immigrant women and the ways of producing them had been closely linked with the process to form ideas of race and nation in both their homelands and the U.S.A. The research findings helped me to develop my theoretical understanding of nation, race and ethnicity, but also they contributed to the further discussion of emerging transnational media activities in modern times and the concept of ‘transnationalism’ itself.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	286,587	85,976	372,563
2012年度	213,413	64,023	277,436
年度			
総計	1,700,000	509,999	2,209,999

研究分野：総合人文社会

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：北アメリカ、移動、越境、メディア、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 越境的なメディアと社会変動

近年、19世紀から20世紀はじめにかけての家族、国家、人種・民族、エスニシティをめぐる越境的な言説やメディア、社会変動が注目され、移民たちの人種・民族・エスニックアイデンティティーが越境的に構築される過程が分析されるようになった。また、そうした重層的な文脈の中で、女性たちが、主体・客体として、どのように社会変動に関わっていたかについての研究も、積極的に行われるようになってきている。

しかし、研究開始当初、家族・人種・民族、国家についての言説が、送り出し国や欧米のメディア、そして様々な移民・エスニック集団のメディア言説や社会変動の中でどう相互にかつ越境的に関わり合っていたのかが、まだ十分に研究されているとは言えなかった。とりわけ、20世紀はじめ、アメリカでの複雑な人種・エスニック言説が、いかに様々な移民集団の女性たちを表象し、また、彼女たちがどう自己集団のメディアやアメリカのメディアに関わっていたのかを扱った研究が少なかった。

(2) 東欧系移民、日系移民

本研究代表者は、アメリカの近代の越境的なメディアに民族・人種の言説がどのように形成され表象されたのか、東欧系移民とアジア系移民を対象としてそれぞれ研究を続けていた。また、量的質的メディア分析に使われる様々なソフトウェア(N-vivo、Atlas-tiなど)での研究方法も習得していた。

そのため、20世紀初めのアメリカ合衆国における東欧系移民と日系移民に焦点をあて、20世紀はじめの合衆国における、さまざまな移民集団の変動する社会・経済・政治・文化的文脈や、彼らの人種・エスニシティ・民族意識の越境的な形成・表象、また、「白人性」(whiteness)とアメリカ市民としてのアイデンティティー形成の関連などを分析することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀初めのアメリカ合衆国において、越境的で複雑な人種・エスニック関係の中、「家庭論」をめぐる言説形成や社会改革運動に、移民女性たちが主体・客体としてどう関わったのか分析することである。当時、アメリカでの社会改革運動、ヨー

ロッパやアジアの移民送り出し国・地域での国民国家形成運動など、政治的・社会的な運動とそれに関する言説が、アメリカの多様な移民・エスニック集団の家族・人種・民族をめぐる言説形成と社会変動に影響を与えていた。本研究では、移民メディアやアメリカのメディア言説を分析すると同時に、様々な移民・エスニック集団を調査することで、比較の視点を導入した。特に、人種的・民族的に、また経済・政治・文化・社会的に「他者化」されていくアジア系移民と、白人アメリカ市民としての同化を目指した欧州系移民との比較・関わりに焦点を当てた。

3. 研究の方法

(1) 概要

本研究では、移民女性たちの多様性と、彼女たちを取り巻く社会・政治・経済・文化的な権力関係を明らかにしつつ、移民女性たちがどのように「家庭論」についての言説形成や社会改革運動にかかわったかを、より複雑なエスニック関係を考慮しながら分析した。

具体的には、19世紀後半から20世紀はじめのアメリカの新聞や雑誌を内容分析し、「家庭論」「社会改良論」に関して、さまざまな移民集団がどのように表象されているか、また、実際に、各移民集団は、こうした革新主義・社会改革運動やアメリカニズムとどのように関わっていると表象されていたのかを分析した。さらに、「家庭論」と社会改革運動に、アジア系と欧州系移民のそれぞれの女性団体や移民女性たちがどう関わっていたかを検討した。本研究では、特に日系移民とクロアチア系移民をケーススタディーとし、かれらの移民集団の社会・文化・政治・経済的状况を調査し、「他者化」されていくアジア系移民と、欧州系移民など「白人アメリカ市民」を目指していく欧州系の移民・エスニック集団が、それぞれ「家庭論」をめぐる言説形成や社会改革運動にどう関わりあっていたのか比較した。

(2) 「家庭」をめぐる言説の分析

はじめに、19世紀後半から1920年代まで、「家庭」や社会改革論とさまざまな移民・エスニック集団に関する言説が、アメリカの主要メディアでどう表象されていたか、アメリカの主要な雑誌や新聞を調査し、質的・量的内容分析の手法を使って分析した。

分析資料は、アジア系移民の人口がアメリカ本土で最も多く、また欧州系移民も在住・

流入していたカリフォルニア州の主要な新聞 (San Francisco Chronicle, Sacramento Bee など) を中心に調査した。

分析方法は、まず、分析する各新聞の発行の背景 (創刊者、編集者、読者層の調査、新聞社の歴史や当時の編集方針など) を調べた。

次に、質的内容分析の手法を使い、新聞記事にあらわれる家庭像と様々な移民・エスニック集団像の表象を、その政治・文化・社会的背景などを調査しながら分析した。これらの調査を通じ、各移民集団やその諸団体のアメリカでの社会改革運動とのかかわりや、各移民たちの対応をも概観することができた。こうして、アメリカの主要メディアに現れる家族や「家庭」論と人種、民族、国家に関わる言説を検証しなおし、人種・国家・民族・家族・階級、女性といった視点で、移民たちがどう表象されたかを考えた。同時に、当該移民たちが置かれた社会・政治・経済・文化状況を検討した。内容分析には、量的、質的どちらも Atlas-ti (このソフトは質的内容分析向きだが、量的内容分析のための付属機能もついている) や N-vivo を使って行った。

(3) 社会、経済、政治、文化的背景

次に、19 世紀後半から一九二四年移民法成立までの間の、当時の移民女性の社会・文化・政治・経済的状况を、主にカリフォルニア州に焦点を当てて、より地域的なレベルで調査した。この調査は、多様なエスニック関係の中にある移民集団の社会・経済・政治・文化背景を浮かび上がらせることを目的としていた。

(4) 日系移民と家族、国家、民族

移民コミュニティと移民メディアの言説をジェンダーの視点から検討した。本研究では、まず、日系移民を中心に調査をはじめた。当時の日系移民の代表的な移民新聞 (『日米新聞』『新世界』『羅府新報』など) を内容分析し、新聞に提示されている「家庭」論がどのようなものなのかを調査した。同時に、各新聞の編集方針や歴史なども調べ、家族や国家、民族に関する言説を生み出す背景も明らかにしようとした。

また、日系移民女性の社会活動や移民メディアとの関わりを調査した。例えば、当時の『日米新聞』(サンフランシスコ) や『羅府新報』(ロサンゼルス) に多くのエッセイ、手紙、記事や、文学作品などを投稿したり、詩集や文学作品などを自費・共同出版した女性たち—高橋康子 (ローダイ)、長谷川咲子 (ロサンゼルス)、久保綱子 (ロサンゼルス)、中西さく子などを調べた。

この作業は、日本の越境的なメディアや日系移民メディア、そしてアメリカのメディアで覇権的な「家庭」をめぐるジェンダー言説

が、人種、民族、国家に関する言説とも相互にかかわり合いながら、地域レベル、コミュニティレベルで、どのように潜在的な読者層に消費されたのか (またはされなかったのか) を例証することにもなった。さらに、こうした中で、女性たちの言説や社会活動が、アメリカのメディア・世論に、どう対応していたか、また、移民集団間にどんなかかわりがあったのかを考えることになった。

(5) クロアチア系移民と家族、民族、国家

次に、比較の対象として、東欧系移民、特に、クロアチア系移民に焦点を当て、移民コミュニティや移民新聞についての分析を行った。具体的には、クロアチア民族協会など代表的な移民協会とその出版物—協会の会員規約、大会記録、協会発行の移民新聞や機関誌などを内容分析した。この分析では、アメリカの東欧系移民の変動する社会・経済・政治・文化的文脈や、彼らの人種・エスニシティ・民族意識の形成と表象、また、「白人性」(whiteness) とアメリカ市民としてのアイデンティティ形成の関連などに焦点をあてた。このことは、越境的な社会変動やメディア活動が、トランスナショナルな言説空間をどのように生み出し、アメリカのクロアチア系の人種・民族・エスニックアイデンティティ形成に影響したのか、ジェンダーの視点から検証することになった。

(6) 資料収集の方法

日系移民やアメリカのメディアに関する資料は、東京大学アメリカ太平洋地域研究センターなどの所蔵のマイクロフィルム資料、UCLA やカリフォルニア州立図書館等所蔵の資料など、可能な限り電子化された新聞又はマイクロフィルムのコピーという形で入手した。

また、当時の日本やアメリカの越境的なメディア言説を知るために、国立国会図書館や首都圏の大学付属図書館、京都の同志社大学でも資料収集を行い、更に多くの新聞や雑誌の記事を集めた。

東欧系移民の資料調査は、特に、東・南欧系移民の当時の新聞・雑誌などの資料を蓄積している、ミネソタ大学 Immigration History Research Center (IHRC) から、資料を取り寄せた。

4. 研究成果

(1) 平成 21 年度の研究成果

平成 21 年度では、まず、アメリカ合衆国の移民法や各移民集団の歴史等、アメリカ合衆国の移民史を二次文献を中心にして体系的に調査した。また、アメリカの移民史全般の議論を深めるため、アメリカ学会、日本アメ

リカ史学会などの大会に参加した。

次に、日系移民の移民メディアを調査し、特に、日系移民メディアにおいて、女性移民たちがどのように産児制限論と母性論を展開したのかについての論文 (The voices of women on birth control and childcare: A Japanese immigrant newspaper in the early 20th century U.S.A.) を、イギリスの学会 British Association for Japanese Studies の学会誌 *Japan Forum* (Routledge (Taylor & Francis Group)) に発表した。また、日系移民研究の理解を深めるため、立命館大学米山裕先生等が中心で開催された研究会にも参加した。

さらに、欧州系移民のケースの理解を深めるため、アイルランド系や東南欧系の移民集団の歴史と当該期の社会・政治的文脈を二次文献を中心に調査した。特に、それらの集団の様々な言説と家庭論との関わりを調査するため、東欧系の移民協会と主要な移民メディアに注目した。ミネソタ大学よりクロアチア系移民の新聞二紙のマイクロフィルムを数年分取り寄せた。また、クロアチア民族協会の会員規約の分析を、購入したソフトウェア (N-vivo 等) を使って進めた。

以上、平成 21 年度の研究調査を通じ、人種・民族のカテゴリーの構築を通じ経済・政治・文化・社会的に他者化されていくアジア系移民と、白人アメリカ市民としての同化を目指した欧州系移民を比較しつつ研究を進めることができた。

(2) 平成 22 年度の研究成果

平成 22 年度では、移民メディアへの女性達の関わりや移民協会の会員の組織化と移民社会形成への動きを検討した。

日系移民に関しては、平成 22 年 6 月に日本移民学会と平成 23 年 3 月発行の『英語英米文学』で日系移民女性のメディア活動について発表し、移民新聞への短歌投稿を通じて、女性達がどのように覇権的な女性像の形成に関わり、また対抗的な声を上げたのかを検証した。

東欧系移民の研究に関しては、平成 22 年 9 月の日本アメリカ史学会で研究発表を行い、クロアチア系移民最大の民族組織であるクロアチア民族協会 (Nardona hrvatska zajednica (NHZ) = the National Croatian Society (NCS)) を取り上げ、1894 年の設立から民族意識に基づいて政治活動を行うクロアチア同盟が 1912 年に成立するまでの協会の移民労働者の社会・経済互助組織としての組織化の過程を、越境的な民族意識とアメリカ市民という概念の形成という視点から論じた。

(3) 平成 23 年度の研究成果

平成 23 年度は、「家庭論」や「家庭」をめぐる女性たちの組織的な運動の背景にある社会、政治、経済的文脈を検討した。

まず、昨年度の研究を発展させ、移民コミュニティの形成を、移民協会の会員の組織化に注目して、より詳しく検討した。東欧系移民集団の組織化についての研究は、論文「越境的な民族意識の形成とアメリカ合衆国への同化—クロアチア民族協会を中心に」として発表した。この論文は、山川出版から共著の論文集『東欧地域研究の現在』として平成 24 年に出版された。

つぎに、アメリカ合衆国の世論が、どのように移民たちをとらえ、表象していたのか、またその時にどのような「家庭論」が形成され、移民たちに望ましい家族像が提示されたのかを検討した。この時、特にカリフォルニア州の新聞メディアに注目し、ローカルな形で各移民集団へのイメージの付与がどのように行われたのかをケーススタディーとして取り上げることにし、主要な新聞 (San Francisco Chronicle など) の調査を行った。

(4) 平成 24 年度の研究成果

平成 24 年度では、本研究の総括の年度として、19 世紀末から 20 世紀初めのアメリカ合衆国における日系・東欧系移民の社会・文化・政治・経済的状况を概観し、「他者化」されていくアジア系移民と、「白人アメリカ市民」を目指していく欧州系の移民が、越境的なナショナリズムやアメリカニズムに関する言説形成や社会改革運動にどう関わったかを、ジェンダーの視点から分析した。

前年度に引き続き、女性運動や社会運動関連の一次資料や論文などを収集し、東欧系移民や日系移民の女性たちやその家族像というものが、どのように表象されているのかを比較した。特に、クロアチア民族協会に焦点を当て、1894 年から 1915 年までの当協会の会員規約や大会記録、移民新聞等を調査した。この調査では、当該協会が、移民たちの家族や親類、同郷、各支部への所属などのネットワークをいかに利用して越境的な組織化を行ったのか、また、越境的な民族意識を形成、強化しつつ、アメリカへの同化がいかに戦略的に図られていったのかを検討した。研究成果は、前年度より推敲を重ねていた論文「越境的な民族意識の形成とアメリカ合衆国への同化」(柴宜弘他編『東欧地域研究の現在』、2012 年) に発表した。また、クロアチアからの人の移動やクロアチアのディアスポラについて、「越境する人々」、「ディアスポラ」(石田信一他編『クロアチアを知るための 60 章』、2013 年) に発表した。

日系移民に関しては、国際日本文化研究センターの共同研究会研究員の委嘱を受

け、「日系移民の歴史と文化」研究会に参加した。日系移民新聞『新世界』などの資料収集を行い、在米日本人会の年報等を分析して、移民女性たちがどのようにメディアやコミュニティと関わったかを調査した。

(5) 本研究成果の意義

本研究は、詳細な質的・量的研究調査・分析を通じて 20 世紀はじめのアメリカ合衆国における移民女性の多様性を示し、その社会的・政治的・文化的・経済的背景を明らかにしようとしたという点で、意義のあるものであった。また、越境的な近代のナショナリズムや人種意識形成に、女性たちが主体・客体としてどう関わったのかを批判的に調査することができた。本研究で、移民女性のメディア上での声の表象や形成と越境的な社会運動との関連を、アジア系移民（主に日系移民）と欧州系移民のケースをそれぞれ調査し、比較することができた。

こうした研究結果をふまえ、今後は、アメリカのさまざまな移民・エスニック集団間の関係を視野に入れながら、さらに、日系、東欧系移民の研究をすすめ、多様な人種・民族・エスニック集団を抱えるアメリカでの、民族・人種・エスニシティ・国家に関する越境的な言説や社会変動を考えていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 一政 (野村) 史織、恋愛を書くこと：20 世紀はじめの『日米新聞』における女性投稿短歌、英語英米文学、査読無、51 巻、2011、83-99
- ② Nomura, Shiori, The voices of women on birth control and childcare: A Japanese immigrant newspaper in the early 20th century U.S.A., Japan Forum, 査読有、Vol.21, No.2, 2010, pp. 255-276
(<http://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/09555801003679165#.Ub5325UWg4Y>)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 一政 (野村) 史織、「越境的な民族意識と市民概念の形成—合衆国のクロアチア民族協会を中心に」日本アメリカ史学会、2010 年 9 月 19 日、東京女子大学
- ② 野村史織、「恋愛と結婚をめぐる女性投稿短歌—20 世紀はじめの「日米新聞」を

中心に」、日本移民学会、2010 年 6 月 27 日、立命館大学

[図書] (計 3 件)

- ① 一政 (野村) 史織、明石書店、ディアスポラ—世界に広がるクロアチア系の人々のコミュニティ (石田信一他編『クロアチアを知るための 60 章』)、2013、286-289
- ② 一政 (野村) 史織、明石書店、越境する人々—移民と難民を中心に (石田信一他編『クロアチアを知るための 60 章』)、2013、295-298
- ③ 一政史織、山川出版、越境的な民族意識の形成とアメリカ合衆国への同化—クロアチア民族協会を中心に (柴宜弘他編『東欧地域研究の現在』)、2012、225-241

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
一政 (野村) 史織
(ICHIMASA (NOMURA) SHIORI)
中央大学・法学部・准教授
研究者番号：20512320